

獄 中 記

<福山辰夫>

第九回

皇紀 2654 年【平成 6 年・西暦 1994 年】

1月1日(土) 元旦

結局、寝付かれず睡眠不足で、元日の朝を迎える。

そもそも、圀圀の中(うち)に居る身でありながら、正月も何もあったものではないが、朝餉時に「御節の折詰」と「二の折」(*単品の和菓子詰め合わせ)の給与有り。また、主食も三が日だけは「麦飯」(バクシャリ)から、「白米」(銀シャリ)乃至「餅」(*三が日とも昼餉時に給与)に変更され、懲役にとってはこの程度で、正月の気分を味わう事になる。

午前中のテレビVTR視聴は、『ルーキー』(製作:米国。配給:ワーナーブラザーズ)。

1991年日本公開。出演:クリント・イーストウッド、チャーリー・シーンほか。監督:クリント・イーストウッド)。クリント・イーストウッドが、監督・主演の映画。ロサンゼルスを舞台に、ベテラン刑事のニック(クリントイーストウッド)は捜査中に相棒を殺され、後任の相棒として付けられた新人警察官デビット(チャーリー・シーン)の教育係になる。それは、イーストウッドの代表作『ダーティハリー』を彷彿させる刑事アクションものであるが、所々にコミカルなシーンも取り入れており、演者としてというよりも、監督としてのイーストウッドが、この作品に対する意気込みの程を感じた。テレビVTR視聴中に、朝届いたばかりの「年賀状」が配布される。

午後は、元日位ゆっくりしようと布団に包まり、横臥をしながらのテレビ視聴を行うも落ち着かず。結局、直ぐに布団を畳み「臨地」(書道)に勤しむ。

1月2日(日)

昨日、朝餉時に給与された「御節の折詰」も完食。今日も、午前中はテレビVTR視聴有り。

『ディズ・オブ・サンダー』(製作:米国。1990年公開。出演:トム・クルーズ、ロバート・デュバル、ニコール・キッドマンほか。監督:トニー・スコット)。

「もう一つのトップガン」と言われる作品で、カーレースにすべてを掛けた若者の青春群像を描く。主演のトム・クルーズは原案を担当し、レースシーンでは自らハンドルを握っている。

午後13時頃から、平成6年初の「総入浴」(15分間)が実施される。入浴後は、短時間乍らも筆を執り「臨地」に勤しむ。

1月3日(月)

『年末年始の連休』も最終日。

午前中にテレビVTR視聴有り。『夜逃げ屋本舗』(製作:東宝。1992年公開。出演:中村雅俊、高木美保、益岡徹、榎原利彦、大竹しのぶほか。監督:原隆仁)。バブルが崩壊したこの御時世に、借金苦に喘ぎ「夜逃げ」なんていうのは良くある話であろう。だから、夜逃げ屋という商売も現実になり立つのではないだろうか。しかし、借金を踏み倒して「夜逃げ」をするという行為は、人としての倫理感が問われると思う。それは屹度、小生らが想像する以上に娑婆は世知辛いのであろう。

だからといって、忘れてならないのは「信義」である。この二文字を深く心に刻み込んで、今後も生きねばならぬ。午後のテレビ視聴も、霜焼指を摩りながら「臨地」に勤しむ。

明日から通常の生活に戻る訳だが、今の境遇は何処まで行っても懲役である。だから、何時迄も正月気分には浸っている場合ではないのだ。

1月4日(火)

平成6年の『仕事始め』。但し、年が明けたからといっても何ら変わる事無く、昨年暮れにやり残した原稿の「ワープロ入力作業」を粛々とこなす。

1月7日(金) 人日

今日は、『人日』(*七種=ななくさ)。既に圀圀の中は、正月気分なんぞは微塵も無い。

終日(ひねもす)、写植文選工として「ワープロ入力作業」に従事する。

1月8日(土)

免業日。午前中は10時から11時30分迄、慰問演芸が有り。毎年恒例の『神馬茂ショー』で、新春芸能ショーと名を打っての催事だ。同囚らは舎房に戻ると「寒いのに迷惑」だとか、「つまらねえ慰問」と口を衝いて出るが、娯楽も少ない堀の中で、演芸を通じて受刑者を元気付け、また癒そうという気持ちは汲んでやっても良いのではないか。況してや、皆さんボランティアなのだ

から。 午後は、月末に提出する『平成6年第一期漢字部昇位試験（第四部）』の臨書課題（楷書・半紙）作品を揮毫する。

1月11日（火） 鏡開き

運動の為、講堂へと移動した際にふと思ったのが、ステージ上には未だに「鏡餅」が供えてある。確か、今日は『鏡開き』ではなかったか？ 運動を終えて還工し、早速、写植文選工という作業の性質上、辞書や参考書の類（たぐい）は、役得として書棚から持ち出せる。

そこで、『鏡開き』について調べてみると「目から鱗」。なんと地方によって『鏡開き』の日も微妙に違う事を知る。 関東生まれで関東育ちの小生は、1月11日（*松の内を7日迄とする）であると認識していたが、これは「東北・関東・九州など多くの地方」。

1月15日（*松の内を15日迄とする）は、「関西を中心とした地方」。1月4日と三が日明けたら行うのが、「京都と近隣の一部地方」と分かれるのだと。余談乍ら、古より我々の祖先は、「進取の精神」で以って他国の良いと思うものを取り込みつつ、悠久の年月を掛けて、国のかたちとしての「文化・風俗・慣習」を生む。更に、元来の勤勉さと叡智の結集によって、それを昇華させてきた。だからこそ、今日こうして我々が存在しているのも、数多なる祖先の血脈の引継ぎに他ならない。この四方を海に囲まれ、南北に縦長と伸びた列島に『日本人』が住まう意義とは、一体なんなのであろう。

一年を「春夏秋冬」という四季で区切り、二十四節気・七十二候という節目を大切にしつつ、身を以って自然を受け止める。そこには、決して神を畏れることを忘れず、五穀豊穡を祈り、収穫には感謝を込めて祭祀を行う。これら全ての条件が揃っていたから、この繊細なる感性を持つ『日本人』が育（はぐく）まれたのではないか。『鏡開き』から話が大幅飛躍をしたが、娑婆の喧騒の中に居ては、日々生きるのに精一杯であり、こんな事を考える暇はないであろう。

1月12日（水）

12月分の賞与金教示有り。「4等工4割増+1割」=3,556円也。作業中は脇見も出来ず、一ヶ月間『刑務作業』を行い汗と涙の結晶が、この微々たる金額になる。

そもそも、人間として扱って貰えないという反発心は、懲役なら誰もが持っている筈。

だが、施設は灰色の高塀に囲まれ、今も「密室の故意」が罷り通る。お前ら大体が、自ら罪を犯して塀の中に来たくせに、何を今更ごちゃごちゃと言っているのか。そこで皆、諦めを込めて口にする言葉が「所詮、懲役は懲役だよ」と。

だから、自由を抑圧された人間が幾ら文句を言おうと、人権がどうだとかほざいても、此処は「化外の地」。元々、法の外で生きているアウトサイダーらには、奴ら（看守）の同情なんてものは皆無だ。どうせ、自ら進んで飛び込んだ「修羅の世界」である。負けてたまるか！

1月13日（木）

工場に出役し、私費通信教育として受講中の、圖南書道會宛に『平成6年度漢字部昇位試験（第四部）』受験料（3,000円）の支払い願箋を、教育課長と会計課長宛で提出。

また、1月1日に妻のお父さんに初めて年賀状を頂いた御礼として、先の免業日に認めた便りを、工場定期発信日に付き提出する。昼餉後は、12時20分から13時20分迄『書道教室（3班）』に出席。講師の鈴木登郁先生に、漢字部昇位試験課題の添削指導を受ける。

1月15日（土） 成人の日

小生が『成人式』を行ったのは、神奈川県横須賀市長瀬3-12-1に在る『久里浜特別少年院』である。今でも鮮明に覚えているのが、久里浜特少の体育館に収容されている院生全員が集い、成人を迎えた小生ら十数人が「茶色のブレザー（久里浜中央自動車学校の教官用）、紺色ネクタイ、白色スラックス」を着用しての式典参加だった。

そして、一生に一度の『成人式』を迎える我が子の姿を、是非とも一目見て頂きたいという院長の温情で、成人を迎えた院生の親御さんに限り、施設への『特別入所許可』を認め、各々の両親らが見守る中、来賓である横須賀市市長より祝辞を賜る。尚、式典の最後に成人祝いの記念品として、横須賀市の市章が刻印された「写真アルバム」（一冊）を、同市長自ら直接手渡しで贈与。

その際、成人となった一人一人に対して、握手と激励の言葉を頂いた事は、今でも頭の片隅に残っている。あの頃は、何かというと「少年ヤクザ」という言葉で一括りにされていた。

でも式典では、小生の左隣りに小島太郎（極東関口会二代目島田会）の兄弟が居て、千葉県市原市のO田（稲川会系列）、新宿・歌舞伎町のK田（極東関口会真誠会系列）、千葉のI藤（住吉連合会青田睦会）とあの時の連中は、今何処でどうしているのだろうか？

唯、久里浜特少以来の兄弟分の小島は、娑婆に居て出世街道を歩んでいると伝え聞く。一方、こっちは長期社会不在の寄せ場暮らしという境遇で違いはあるけど、稼業違いとはいえ兄弟分が出世するのは、我が事以上に嬉しくもあり、斯道に於いて切磋琢磨するライバルとしても心強い限り。矢張り、お互いの親分と兄貴分が承認した「真の兄弟分」である。兄弟が娑婆で頑張っていると思えば、この程度の寄せ場暮らしで、泣き言なんか言っていられるかと気力が漲るという

もの。あの弾いた日の翌日、埼玉県警本部の暴対と高島の親父との間では、明日の夜に川越警察署へ小生を出頭させるという事で話が付いていた。その出頭前夜に、暫しの別れとなる小生を気遣って、兄弟と舎弟の迫が惜別の席を設けてくれた事は、今でも忘れない。

結局、3人で朝になる迄酒を酌み交わし、心地好い酔いの中で兄弟が言ったのが、「俺も兄弟に負けないように頑張るから、必ず満期出所の時には、うちの会を挙げて川越の一家と共に兄弟を出迎えるから」という約束。現在、齢29歳になったけれども、10代から少年院での生活。

20歳から22歳迄の少年刑務所暮らし。そして、26歳になって直ぐに事件を起こして、LB宮城刑務所に於いて刑期を務める日々の中、あの久里浜特少の『成人式』から、未だ9年しか経っていないのである。誰もが一度しかない人生、それも人として、最も成長過程にある青春時代を、こんなにも無駄に過ごして良いのかと反省しきりの一日なってしまった。

後ろばかりを振り向いていた処で、決して前には進めない。「日に新たに、日々に新たなり」の精神で行こう。『成人の日』にて、昼餉時に祝日菜の給与が有り。

1月16日(日)

今月の昇位試験に提出する作品を、昨日今日と集中して書き込む。『平成6年度第一期漢字部昇位試験(第四部)』の課題は、『九成宮醴泉銘』(唐・欧陽詢)の半紙臨書で「玉砌」。

1月17日(月)

終日(ひねもす)、「ワープロ入力作業」に従事する。夕餉後の17時30分から18時30分迄、宗教教誨『神道』に出席。本日は、大内先生の教誨で「新年の話し」をして頂く。

『豊葦原瑞穂国』(とよあしはらのみずほのくに)とは、我が国「日本」のことであり、『古事記』=《我が国最古の歴史書。和銅5年(712年)に太安万呂が編纂し、元明天皇に献上されたもの》にも記されている。この『葦原』とは「肥えた土地」という意味であると、先生の解説有り。

1月18日(火)

夕方、妻から便りが届く。

ここ数ヶ月程、妻からの音信が無く、久し振りの来信かと目を通せば、「私を許して、別れて下さい」という内容。多分、新しい男が出来たのだろうと想像はしていたし、長期刑を務めるヤクザな男を、それも若い身空で帰りを待つなんて、初めから期待するだけ無駄という事。

夜のテレビ視聴時に、妻宛に便りを認める。

1月19日 (水)

終日、気分がモヤモヤしつつも、無事作業を終えて還房する。

今夜もテレビ視聴時に、妻宛に便りを認める。齢21歳の女に、長期刑を務める男を待つことを求める自体、土台無理な話なのである。同囚の誰かが言っていたが、「男は頭で物事を考える生き物だが、女は子宮で物事を考える生き物だ…」と。確かに、男は先々の事に思いを馳せるロマンチストだが、女は目先の利益に飛びつくリアリストなのだ。

囿囿の中に暮らす身としては、是も非もなく、今の率直な気持ちを妻に伝えるだけ。

1月20日 (木)

工場定期発信日に付き、妻宛の便り (便箋7枚) を提出する。

1月21日 (金)

昨日、妻宛で便りを発信したばかりなのに、午後になって事前連絡もなく、妻とお母さんが面会に来る。埼玉県入間郡毛呂山町から電車で大宮駅迄出て、東北新幹線と乗り継いで来たようだ。

但し、昨日発信した小生の便りは、まだ届いていないとの事で、兎にも角にも、便りには今の気持ちをしっかりと認めてあるので、まずは読んで欲しい。そして、気持ちの整理がついたら返事をくれと伝える。今更、もう冷めてしまった愛情は、元に戻る事はないだろう。

それは重々承知しているし、彼女を困らせるつもりもない。唯、訳も言わず一方的に「ごめんなさい、別れて下さい」の一点張りでは、許したくとも許せないではないか。

面会の間、妻はズーっと泣いているだけで、碌に話しもせずに時間終了。

1月24日 (月)

本日、工場用「チョッキ」(1点)の一斉交換が有り。真っ新が支給される。

1月25日 (火)

朝の出役後に、圖南書道會『平成6年度第一期漢字部昇位試験』(第四部)受験課題である、臨書「玉砌」(半紙・楷書)作品を、工場担当経由で教育課に提出する。

昨日の工場用「チョッキ」に引き続き、工場用「作業帽」の一斉交換が有り。

尚、昼近くになって事前連絡もなく、父が面会に来る。勿論、妻との離婚協議の件であり、何を言いたくて来たのかも、概ね予想は出来た。

のっけから父は、息子を諭すように「初めから、十一年も待っているなんて事は土台無理な話しであって、お父さんの方から逆に言ったんだよ。まだ貴方は若いのだから、刑務所に入っているうちの息子の事は忘れなさい。そして、一切合切を気にしないで良いから、此処で身軽になって自分の人生をやり直しなさい。うちの息子に貴方を縛るだけの理由はないのだから」と話したという。「だからお前も、この辺で彼女を自由にしてあげたらどうだ。お前には、時間が腐る程あるのだから、まあ良く考えてみることだな」と、馬鹿息子を言い聞かせるように語り、父は背を向けて面会室を後にした。

帰りの際に、何時もの如く『日刊スポーツ新聞』（3ヶ月分）と本3冊の差し入れをして頂く。

1月28日（金）

工場の定期私本配布日に付き、購入の週刊誌1冊。月末の金曜日なので、下付を願い出していた『花神(上)』（司馬遼太郎・新潮文庫）、『三島由紀夫の霊界からの大予言』（太田千寿・日本文芸社）の2冊が手元に届く。

1月30日（日）

午前10時から11時30分迄、『3級会』が催され出席。「缶コーヒー」と「お菓子」2種類を事前に購入して、VTRを視聴しつつ喫食する。但し、集会を催す講堂は、ジェットヒーター2台をフル稼働しても、全く暖かくならず寒い。午後は、免業日のルーティンである「臨地」に勤しむ。

1月31日（月）

先週工場担当に話し、予め願箋にて願い出していた「現金書留」による『特別発信願』の許可が下り、会計課の担当が来工。直ぐ担当台に呼び出され、工場の食堂へと移動。会計課の担当と領置金100,000円を確認し、自らの手で書留に現金を入れて糊で封を閉じる。更に、会計課の担当より「書留封筒が20円。送金代が680円。送金額が100,000円で、その合計金額=100,700円を、君の領置金から差し引かせてもらうから」と、その旨の告知を受けて手続き完了。

書留の送り主は「妻の名前」だが、先日の21日に埼玉県から妻と2人で仙台迄、わざわざ面会に来て下さったお母さんに対する、些少でも『交通費』の足しにして頂きたく、同封した文（便箋1枚）に記す。作業中は、余計な事は考えないと、自身に言い聞かせるのだが、矢張り彼是と考えてしまう。ある程度は覚悟していたものの、これが長期刑を務める懲役が、真っ先に受ける試練の一つなのであろう。